

タイにおける日本文学の受容

——芥川文学の事例を中心に

ナムティップ・メータセート*

✉ Namthip.M@chula.ac.th

This study discusses the reception of Japanese literature in Thailand. It first presents an overview of the history of translation through four periods: the first period (1950s-1970s), when most translated works were modern novels whose authors were popular in Western countries; the second period (1980s-1990s), when children's literature was on the rise; the third period (2000s), when contemporary literature boomed; and the fourth period of alternative consumption and reproduction (2010s), which saw a dramatic increase in the number of readers along with variations of interests. Specific examples of how Ryunosuke Akutagawa's literary works have been reproduced and adapted in Thailand are explored through a case study.

Keywords Japanese Literature(日本文学), Reception(受容), Translation(翻訳), Ryunosuke Akutagawa(芥川龍之介), Adaptation(アダプテーション)

* 本稿におけるタイ人名の表記はタイの慣例に従い、名・性の順とする。

1 はじめに

日本とタイの交流は諸説により古く遡って600年とも400年ともいわれているが、近代国家として正式な修好宣言がなされたのが1868年であり、2017年には日・タイ修好宣言130周年を迎えた。一方、日本文学を受容に関しては、1954年に徳富蘆花の「不如帰」が日本の文学として初めてタイ語に翻訳されて以来、60年以上が経っている。当初は、知識人、翻訳家などが個人的に興味を持った作品を紹介するような形で、日本文学は、西洋で人気があって英訳の多い作家の作品、例えば、川端、谷崎、三島などの近代小説と一部の児童書を中心に、細々と翻訳出版されてきたマイナーな分野だった。こうした状況に大きな変化が見られ始めたのは21世紀に入ってからである。タイ社会、特に都市部における所得・教育水準の向上とライフスタイルの変化など、受け入れ環境が整えられたことと、インターネットの普及によるポップカルチャーおよびサブカルチャーの流入とともに、現代文学やライトノベルなどが数多く翻訳出版されるようになり、日本語からの翻訳図書市場が大きく成長し、現在でも出版業界を賑わせている。2018年現在、子供のころから日本のポップカルチャーに慣れ親しんだ新しい読者層が飛躍的に増加しており、「ポップで分かりやすい」日本現代文学の需要はますます増えている。そんな状況の中で、芥川龍之介は、日本文学がタイにおいてまだ難解でつまらないイメージのマイナーな分野と目されていた時代から早く紹介され、現在でも一般にもっとも広く知られている数少ない日本近代文学作家だといえる。

本稿では、日本文学がタイの中でどのように受容され、どのように影響があったかという経緯と現状について考察し、翻訳史を通してタイにおける日本文学受容の全体像を紹介しながら、芥川龍之介の翻訳・受容状況を具体例として取り上げたい。芥川作品のどのような点がタイ人読者をひきつけるのかを考えることは、今後の日本文学がタイ国でさらに浸透していくための大きな手掛かりとなるだろう。

2 翻訳史を通してみるタイにおける日本文学受容状況

前述の通り、タイで初めて翻訳された日本文学は1954年の徳富蘆花の「不如帰」で、これは英訳版「Namiko」からの重訳であった。以来、2001年に吉本ばななの「キッチン」が翻訳出版されるまで約半世紀、タイで紹介された日本文学はほとんど西洋を経由した近代文学または一部の児童書だった。筆者は2007年¹の拙稿において2005年時点の翻訳出版状況の調査結果に基づき、翻訳史を通してタイにおける日本文学受容の変遷を大きく3つの時期に分けて報告した。その報告から10年以上が経ち、現在タイにおける日本文学受容の傾向と現状がどのように変わって来たかを再検証し、以前の3期に加えて、近

¹ ナムティップ・メータセート「タイにおける日本文学受容と研究」(『近代文学』第46集, 2007), pp.294-304.

年、第4期とも言える新しいフェーズに入ったことを今回指摘したい。

まずは、その流れを簡単に紹介する。

第1期：導入期(1950年代~1970年代)

戦後の経済復興の中で悪化した日本のイメージや日タイ関係の回復を目指す時期で、この時の社会背景と翻訳のトレンドの特徴を次のようにまとめることが出来る。

- ・ 経済重視の交流、否定的な対日感情。
- ・ 西洋で紹介された日本文学のマスターピース、近代文学・純文学中心。
- ・ 西洋言語からの重訳(孫訳)が多い。
- ・ 翻訳者・編集者主導型。
- ・ 小さい出版社から少ない部数で出版。
- ・ 公的機関(UNESCOなど)の推奨図書&翻訳者、編集者の個人的な推薦図書。
- ・ アカデミズムの一環として翻訳された近代文学(チュラロンコーン大学一短編集1-3)。

以上のような傾向の社会背景としては、戦後の国交回復ののちに、米ソ冷戦期の世界経済や、高度経済成長による日本の圧倒的な経済的支配力のもとに経済重視の日タイ関係が築かれていたことがあげられるだろう。終戦時にあった日本への否定的感情の上に、さらに貿易摩擦による対日感情の悪化で、1972年には日本製品不買運動も起きた。エコノミックアニマル/黄禍(黄色人種脅威論)といったネガティブで脅威的なイメージも強まった。

この時期にタイで翻訳・紹介された日本文学は、ユネスコの世界図書翻訳コレクション(UNESCO collection of Representative Works)の中に含まれている、異文化理解を目的としたものが中心で、ほとんどが英語訳版からの重訳である。例をあげると、川端康成「山の音」(1969)、「雪国」(1972)、芥川龍之介「羅生門」(1971)、三島由紀夫「潮騒」(1974)などがある。また、1970年代の終わり頃から、国際交流基金(Japan Foundation)などの日本の官民機関から資金援助を受けて出版された書籍が翻訳日本文学の全体の大きな割合を占めるようになった。Thanaporn(2016)も指摘しているように、1970年代の経済摩擦によって国際的に起きた日本バッシング、反日感情などのようなネガティブな日本のイメージを改善するための日本文化普及事業が盛んになり始めたのもこの時期で、日本側の対策(当時の日本首相だった福田康夫が打ち出した外交政策「福田ドクトリン」)による文化交流促進の一環としての翻訳助成推進事業もその一つであった。1970年代の終わり頃から資金援助を受けて出版された書籍がこの時期の翻訳日本文学の全体の大きな割合を占めるという。²

² タイにおける日本文学の翻訳に対する日本の官民機関による助成金に関して詳しくは

第2期：黎明期(1980年代~1990年代)

タイが高度経済成長を遂げ、市民特に都市部の生活水準が上がり、中流階級(中間層読者)が増加した時期である。この時の社会背景と翻訳のトレンドの特徴は次のようにまとめることができる。

- ・ タイ社会・経済の成長、中流階級(中間層読者)の増加。
- ・ 福田ドクトリンの効果による対日感情の改善
- ・ 日本を知るため、日本に学ぶための児童書・教養書の翻訳の増加。
- ・ 日本文学・日本研究アカデミズムの一環としての翻訳中心の状況が続く。
- ・ 英語からの重訳に並行して日本語からの直接翻訳も増加。
- ・ 翻訳者・編集者の推薦に加え、日本側からの推薦・奨励による翻訳の増加。

1980年代に入って継続的に二桁の経済成長を遂げたタイにおいて、市民、特に都市部の生活が豊かになり、増加した中間階級の人々は文化や教育に重きを置くようになった。子どもの人間形成に役に立つものとして児童文学が注目された。福田ドクトリンによる対日感情の改善効果もあり、世界中がエコノミックミラクルを果たした日本に見習おうとする傾向と相まって、教養主義育児神話に支えられてきた日本の児童文学にも関心が向けられ、多数の日本の児童書、教養書が翻訳されるようになった。この時期に翻訳された児童書とは、黒柳徹子の「窓際のトットちゃん」シリーズ、松谷みよ子の「ふたりのイーダ」、「ちいさいモモちゃん」シリーズなどで、教養書としては、井深大「幼稚園では遅すぎる」、「日本文明77の鍵」などがあげられる。

また、前述したように、1970年代後半から始まった日本文学の翻訳事業奨励が益々盛んになり、国際交流基金(Japan Foundation)に加えて、トヨタ財団およびDAIDO LIFE財団に資金援助を受けたタマサート大学の人文社会テキスト出版プロジェクトなどが日本文学の翻訳出版に成果をあげていった。

第3期：転換期(2000年代~2010年代)

この時期の社会背景と翻訳のトレンドの特徴は次のようにまとめることができる。

- ・ インターネット普及、都市化、都市のインフラの整備推進。
- ・ グローバリゼーションによる西洋の世界的娯楽作品の流行。
- ・ 村上春樹、吉本ばなななどの「J文学」と呼ばれる翻訳文学の流行。
- ・ 鈴木光司「リング」ブーム以降のJホラーと呼ばれるジャンルの流行。

Thanabhorn Trerattasakulchaiの論文 *พระ ศิริรัตนสกุลชัย การอุปถัมภ์การแปลหนังสือภาษาญี่ปุ่นในไทย ด้านสังคมศาสตร์ และมนุษยศาสตร์ช่วง ค.ศ. 1970-1980* (JSN Journal Vol.6 No.1, 2016, pp.39-56.) をご参照されたい。

- ・ 商業ベースの翻訳出版、大手出版社の参入。出版社主導型。
- ・ 日本語からの直接翻訳が大きな割合を占めるようになった。
- ・ 競争過多による飽和状態による、翻訳者、製作の質の低下。
- ・ 作品の選定や権利関係は、商業主義に基づく制約を受けている。

1980~1990年代の経済成長による生活水準、教育水準向上とともに読者人口が増加し、書籍・出版市場において以前にも増して外国文学の需要が高まってきた。また、パーソナルコンピュータやインターネットの普及により世界の流行をほぼ同時に取り入れ、消費できる状況になった。この時期の西洋の世界的娯楽作品の流行はタイにも波及しており、シャロックホームズに加えてハリウッド映画原作のベストセラー本の翻訳、例えば、「ハリーポッター」、「指輪物語」などのファンタジー超大作、「ブリジットジョーンズの日記」、ダン・ブラウンのミステリーなども書籍業界を賑わせている。

一方、日本文学については、吉本ばなな「キッチン」(2001)と鈴木光司「リング」(2002)の翻訳書が異例の売り上げを見せ、日本の現代文学翻訳ブームの火付け役となった。以降、現代のJ(ポップ)文学と呼ばれる吉本ばなな、村上春樹、江國香織等の作品と平行して、当事世界的にブームになっている「Jホラー」と呼ばれる日本のホラーやミステリー、例えば、角川ホラーシリーズをはじめ、横溝正史、赤川次郎、東野圭吾、綾辻行人なども次々と紹介され、急速に受け入れられていった。以前、英訳からタイ語訳にしたものに頼っていたが、日本語から直接翻訳される作品も次第に大多数を占めるようになった。

2000年代は、日本のポップカルチャーと共に育った世代が成人した時期であり、日本文学に親しむ下地がすでにあった。日本の現代大衆文学作品の普及により、かつて難解無味の印象が強かった日本文学が、新しい若い読者世代にとって「ポップでキュートな」あるいは「ミステリーでホラーな」日本文学という、非常に親しみやすいイメージを持たれるようになり、読者増も劇的に増加した。

また、1980年代までは著作権への意識が希薄な出版が多かったが、2000年代には著作権が厳しく守られるようになった。正式に著作権利用の許諾を受けて出版しても採算がとれるようにもなった。しかし、タイ国の人々が読みたいと思うものと、日本側が売りたいものが必ずしも一致してはいなかった。両国の出版社主導型の商業主義のもとに翻訳出版される作品が決められていた。

以上の3つの期間は、導入期、黎明期、転換期とも言える時期であるが、その後、2010年代に入ってから新たな傾向が見られるようになった。これを「発展期」とでも名づけられる新しいフェースに突入したと筆者はとらえている。

【表1】日本文学翻訳の推移

出版年代	冊数(作品数)	注
1950年代~1970年代	21 (60)	単行本数(作品数)
1980年代~1990年代	51 (80)	単行本数(作品数) ※一部再版・翻訳者別バージョンを含む
2000~2018年	328(未集計)	単行本数 ※一部再版・翻訳者別バージョンを含む

※ 2000年からは単行本数のみのデータ。ライトノベルは含まれない。

第4期：発展期(2010年代後半)

この時の社会背景と翻訳のトレンドの特徴を次のようにまとめることが出来る。

- ・ ポップ・サブカルチャーの影響を受けた若い読者の増加。
- ・ 多様化した読者のニーズに応じた作品の翻訳の増加。
- ・ 過剰供給による飽和状態の中、大手出版社が軒並み撤退し、オルタナティブ出版社の活躍が目立った。
- ・ 影響力のあるアイドル、インフルエンサーの「おすすめ」への追随。
- ・ 日本語からの直接翻訳が増え、かつて英訳から重訳されていたものを改めて直接翻訳する動きも生まれた。

2010年代からは、大衆文学、ライトノベルに限らず、インターネットを通じて最近タイの若者の中で起きている、いわゆる日本の一連の「文豪もの」ブームの影響をきっかけに近代の作家・原作にも興味をもつ読者が増え始めた。³また、韓国では日本文学ブームが2000年代初頭から起きていて、例えば、韓流アイドル「ガットセブン」のメンバーが日本の文豪作品を愛読していることはファンの中で大きく話題となっていた。そのような「インフルエンサー」と呼ばれる影響力の高いタレントや有名人の愛読書リストの発信によって、その影響を受けたタイ国内の彼らのファンの中にも日本文学に関心を持つ若者が増えている。例えばここ2、3年の間、書店やブックフェアなどで「〇〇の愛読書」というようなpopがつけられて宣伝されたり、特集が組まれた陳列のコーナーが設けられたりすることで、非常に売り上げ効果をあげている状況が見られる。(図1参照)

このような読者層のニーズに合わせて、著作権が消失した近代作家、特に、漱石、太宰、芥川、谷崎、江戸川乱歩などの新旧訳の出版・再版が目立ってきており、小さなブームになっている。長い間絶版だった漱石の「こゝろ」のタイ語訳が大々的に新装版と

³ 例えば、アニメ「青い文学」(日本テレビ)シリーズ、漫画・アニメ「文豪ストレイドッグス」(朝霧カフカ原作・春河35作画)、オンライン文豪転生シミュレーションゲーム「文豪とアルケミスト」(DMM GAMES)、ライトノベル「ピブリア古書堂の事件手帖」(三上延著)シリーズなど。

して発行され、太宰治の「人間失格」が1年の間に3回増刷したことも話題となった。かつて、暗くて理解しがたいと評された文豪の様々な作品であったが、今や、先にあげた作品に見られる、やや中二病とも言える病んだ精神や大仰で詩的な表現などが、現代社会に鬱屈しているタイの若い世代の共感を得て、熱狂的に受け容れられているようである。

2018年現在、依然としてやはり主流のジャンルである日本のミステリーには一定数のファンがついており、日本文学翻訳図書市場の大部分を占めているが、これまでのトレンドと大きく違うのは、それまで翻訳しても少しの部数しか普及していなかった日本の近代クラシックとも言える文豪の作品が再評価され、若い読者に受け容れられた点である。読者たちは、ポップ、サブカルチャーの影響(二次創作、インフルエンサーも含む)をきっかけに原作や作家の他の作品にも興味をもつようになる。読書は教養、趣味以外にもライフスタイル、仲間・共同体意識を高める手段ともなる。漫画、アニメ、ゲームを幼少期から日常的に消費した世代が、創出クリエイターとなって活躍しており、日本文学を読み、影響を受けた作家が出現している。

一方、日本の近代より以前の古典文学の場合はどうか。インターネットの普及により、リアルタイムで日本の最新情報が入手でき、日本の現在が体感・消費できるとはいえ、古語の壁があり、時代のギャップが大きい古典文学の解読ましてや翻訳はさらに難しい。先述したように、日本近代文学への関心は高くなったものの、近代以前の古典文学は翻訳自体が少ない。タイ人の古典文学専門家も希少で、大学の教員と学生らによる教育の一環としての翻訳および抄訳、チュラーロンコーン大学の古典専門家の先生が学術書として抄訳する両手に数えられるぐらいの作品に留まる。⁴

日本では、2017年に井原西鶴「男色大鑑」のコミカライズが話題となり、2018年には読みやすい現代語訳が刊行された。これはBLへの関心から江戸期の男色文学への関心が引き起こされて行ったもので、タイにおいても今後、古典文学にもサブカルチャーを経由した関心が向けられて行くのではないかと期待できる。

⁴ 具体的には、近松門左衛門の戯曲4作品、「風姿花伝」、「古事記」(福永武彦の「古事記物語」からの翻訳)、「取物語と土佐日記」、「百人一首」、「雨月物語」、「方丈記」などがある。

【図1】左：韓流アイドルのおすすめpopがついた「人間失格」のタイ語訳本、
右：タイ語版「文豪ストレイドッグス」



3 タイにおける芥川文学の受容

表2からも分かるように、横溝正史⁵を除けば、近代作家の中で群を抜いて作品数が多い。そして、翻訳の歴史から見ても早くから翻訳・再生産されてきたのは芥川龍之介である。そこで、芥川文学を例に、タイにおける日本文学の受容の在り方を検討したい。

最初に芥川の名をタイに広めたのは、実は書籍ではなく黒澤明監督の映画『羅生門』(1950年)であった。この映画がベネチア国際映画祭グランプリを受賞(1951年)したことにより、原作者の芥川龍之介の名前も世界的に広く知られるようになった。タイでは黒澤版『羅生門』が1953年に上映され、それに感銘を受けたククリット・プラモート⁶が翻案・戯曲化し、1965年に舞台上演した。以来、ククリット版『羅生門』は繰り返して舞台上演され、タイの知識人、文化人、芸術家などの間で浸透していった。また1966年に単行本が発行されて以来、いくつかの出版社を変えて何度も重版されてきた。

5 横溝正史と江戸川乱歩の作品は2000年代に入ってから翻訳されたものがほとんどで、現代ミステリー・ホラー小説ブームの流れの中に含まれている感がある。江戸川乱歩のデータは単行本の単位での集計。単行本に所収している短編で数える場合さらに作品数が増える。

6 ククリット・プラモート(1911年～1995年)タイの第13代目首相。王族ゆかりの家系に生まれ、タイの政治経済のみならず文化方面でも大きな影響力を持つ文豪・評論家。1985年にタイの国家芸術家に指定され、2005年よりユネスコの世界にとって重要個人として登録されている。ロイヤリストであるゆえに、その政治・文化活動によって王制国家の安定・安全を維持するため大きく貢献している。留学経験を活かして海外の文学を多数翻案し、タイの読者に紹介している。

【表2】タイ語に翻訳された近代作家一覧(2018年10月現在)

	作家名	作品数	翻訳パー	
			ジョン	パー
1	横溝正史	32	32	
2	芥川龍之介	31	40	
3	江戸川乱歩	23	28	
4	三島由紀夫	14	17	
5	川端康成	13	19	
6	宮沢賢治	13	13	
7	太宰治	12	14	
8	谷崎潤一郎	7	7	
9	夏目漱石	5	7	
10	大江健三郎	5	6	
11	志賀直哉	5	6	
12	森鷗外	4	4	
13	安部公房	3	3	
14	有島武郎	3	3	
15	井伏鱒二	3	3	
16	徳富蘆花	2	2	
17	林芙美子	2	2	
18	開高健	2	2	
19	菊池寛	2	2	
20	長崎源之助	2	2	
21	島崎藤村	2	2	
22	壺井栄	2	2	
23	竹山道雄	1	4	
24	阿川弘之	1	2	
25	有吉佐和子	1	2	
26	丹羽文雄	1	2	
27	遠藤周作	1	1	
28	灰谷健次郎	1	1	
29	葉山嘉樹	1	1	
30	堀辰雄	1	1	
31	井上靖	1	1	
32	島木健作	1	1	
33	小林多喜二	1	1	
34	国木田独歩	1	1	
35	武者小路実篤	1	1	
36	永井荷風	1	1	
37	永井龍男	1	1	
38	尾崎一雄	1	1	
39	佐多稲子	1	1	
40	佐藤春夫	1	1	
41	里見淳	1	1	
42	内田百閒	1	1	
43	横光利一	1	1	

3.1 芥川龍之介文学の翻訳

1954年に徳富蘆花の「不如帰」が週刊誌に発表され、1975年に単行本が刊行された後も、川端の「山の音」、雪国、三島由紀夫の「潮騒」など、続けて日本近代文学が何点か翻訳出版されたが、いずれも発行部数が少なく、それほど多くの読者の目に触れることはなかったようである。実際に、タイで最も一般読者に早く、広く認識された日本文学は、上記のククリット・プラモート翻案の「羅生門」だと言える。芥川原作からの最初の翻訳はチュン・ブラパーウィワット訳の「羅生門とその他短編集」であり、これは書中に明記されていないものの、恐らくTakashi Kojimaによる英訳“Rashomon And Other Stories”(初版、1952年)からの重訳であった。チュン氏はUNESCO Collection of Representative Worksの世界文学を英語からタイ語に多数翻訳しており、竹山道雄「ビルマの竖琴」(1968)、川端康成「雪国」(1972)などの日本文学の翻訳もしている。

Chakrit(2001)によれば、チュンは1971年にチャリティー上映された映画「羅生門」を見て感銘を受け、翻訳することにしたという。また、その映画の字幕を担当したのはククリット・プラモートであった。⁷チュン訳の「羅生門とその他短編集」の序文には、出版にあたって、日本大使館の協賛を得て、著作権取得に協力してもらったことが記さ

れている。

その後、日本語教育の一環として、チューラーロンコーン大学文学部の講師と学生が翻訳を行った日本近代文学短編集の中に「羅生門」、「藪の中」をはじめ、いくつかの短編が収められ、またその他の英文学翻訳者による「藪の中」の別の翻訳も出たが、いずれも少数の発行部数の初版のまま、広く一般読者の目に触れることなく絶版になった。長編ではこちらもチューラーロンコーン大学日本語科の講師が訳した「河童」のみとなっている。

長く広く読まれているのは重版を繰り返すククリット翻案の「羅生門」(その中身は「藪の中」)であるため、つい近年まで、タイの読者が「藪の中」のストーリーを「羅生門」として長い間誤認したままであった。ククリット版の「羅生門」は、芥川原作も参考しているが、黒澤映画をベースに、英訳を参照し、翻訳ではなく翻案の体をとったものであった。2000年代の現代文学ブームを経て、日本のクラシック文学として認識されてきた近代文学に関心が向けられるようになり、芥川原書を英語、または日本語で読める読者層が増加し、ようやく、「羅生門」という小説のストーリーは映画「羅生門」とは異なる、「映画「羅生門」のストーリーの中心は「藪の中」である」など、それまでの誤認を是正するレビューや評論が広まり始めた。

【図2】 様々なバージョンの「羅生門」。左：ククリット・ブラーモート翻案「羅生門」(1966)、真中：チュン・ブラバーウイワット訳「羅生門」(1971)、右：チューラーロンコーン大学の短編集を再編集出版の新装版「羅生門とその他短編集」(2016)



また、芥川の名は、2011年の映画「ウモーン・パー・ムアン—羅生門」によってもさらに広く知られることになった。この映画に関しては後述する。

芥川作品の翻訳は、そのほとんどが短編であり、中でも再版を多く繰り返してきたのは「羅生門」、「藪の中」、「河童」である。また、翻訳書のみならず、戯曲化、映画化、オマージュ小説化など様々な形に再生産されている。村上春樹や江戸川乱歩ほど大

7 จักรกฤษณ์ ดวงพัตรา แปล แปลง และ แปลงรูป บทละคร Chakrit Duangpattra *Plae Plaeng Lae Plaengrup Botlakorn* (Siam Publishing, 2001), p.230.

衆受けはしていないものの、日本文化に興味を持つタイの知識人、作家、クリエイターなどの間において芥川の認知度や評価は高い。また、最初に紹介された「羅生門」、「藪の中」には政治的な解釈が盛り込まれていたこともあり、タイでは芥川は政治性の高い作家としてとらえられる傾向もある。この傾向については後述する。

【表3】タイ語で翻訳・出版された芥川作品一覧(2018年10月末現在)

出版年	原題	タイ語題	言語	翻訳者	出版社
1966	羅生門(翻案)	บทละครเรื่อง "ราโชมอน" หรือ ประตุมณี	英	クリット・フラーモート	گاโอナー
1971	羅生門	ราโชมอน	英	チュン・フ ^ラ ハ ^ー ・ウイワット	オテ ^ィ ア ^ン
	藪の中	ศพในดงพงไพรและกลุ่มต้นไม้ซีดาร์	英	同上	オテ ^ィ ア ^ン
	袈裟と盛遠	เกชากับโมริโตะ	英	同上	オテ ^ィ ア ^ン
	龍	มังกรที่ทำให้ผู้คนพลเมืองแตกตื่น	英	同上	オテ ^ィ ア ^ン
	奉教人の死	ผู้ที่ยอมตายถวายชีวิตให้กับผู้อื่น	英	同上	オテ ^ィ ア ^ン
1977	蜜柑	ผลส้ม	日	ニテイマ [・] ア ^ヒ ワッタ ⁺ ウ ^{オン}	チュ ^ラ -短編集1
	杜子春	โศษิฐน	日	ウ ^イ ラ ^タ [・] ト ^ー リ [・] ホ [・] フ [・] ア [・] ナ ^ン	チュ ^ラ -短編集1
1978	河童	ขบป๊ะ	日	カ [・] ラ [・] ヤ [・] ニ [・] ・ [・] ソ [・] タ [・] ス [・] ワ [・] ン	ト [・] ア [・] ン [・] カ [・] モ [・] ン
1979	藪の中	ในป่าละเมาะ	英	ル ^ン ル [・] タ [・] イ [・] サ [・] ツ [・] チャ [・] ハ [・] ン	ウ ^イ タ [・] ワ [・] ス
1979	秋	ใบไม้ร่วง	日	ア [・] ン [・] チャ [・] リ [・] ・ [・] イ [・] サ [・] ワ [・] ウ [・] イ [・] ソ [・] タ [・] イ	チュ ^ラ -短編集2
1991	羅生門	ราโชมอน	日	ク [・] ワ [・] ン [・] チャ [・] ノ [・] ク [・] ・ [・] ウ [・] イ [・] リ [・] ヤ [・] シ [・] リ	チュ ^ラ -短編集4
	芋粥	ข้าวต้มมัน	日	ウ [・] イ [・] ス [・] ツ [・] テ [・] イ [・] カ [・] ン [・] ヤ [・] ・ [・] ト [・] ・ [・] ソ [・] ・ [・] チ [・] ャ [・] ロ [・] ン [・] 他	チュ ^ラ -短編集4
	戯作三昧	หุ่่มชีวิตเพื่อนิยาย	日	カ [・] ラ [・] ヤ [・] ニ [・] ・ [・] ソ [・] タ [・] ス [・] ワ [・] ン	チュ ^ラ -短編集4
	地獄変	ฉานนรก	日	ヒ [・] ヤ [・] チ [・] ツ [・] ・ [・] タ [・] ・ [・] テ [・] ン	チュ ^ラ -短編集4
	藪の中	ในป่าละเมาะ	日	モ [・] ン [・] タ [・] ・ [・] ヒ [・] ・ [・] ム [・] ト [・] ン	チュ ^ラ -短編集4
	トロッコ	รถเข็น	日	ハ [・] ・ [・] リ [・] チ [・] ャ [・] ト [・] ・ [・] ル [・] チ [・] セ [・] ・ [・] ニ [・]	チュ ^ラ -短編集4
	白	ชิโร	日	ナ [・] ハ [・] ・ [・] オ [・] ン [・] ・ [・] ヒ [・] ・ [・] ム [・] ア [・] ツ [・] ト [・] 他	チュ ^ラ -短編集4
	三つの宝	สมบัติสามชิ้น	日	サ [・] モ [・] ン [・] タ [・] ム [・] ・ [・] チ [・] ャ [・] ロ [・] ン [・] ク [・] ル [・] 他	チュ ^ラ -短編集4
2000	羅生門(翻案)	ราโชมอน	英	クリット・フラーモート	ト [・] ・ [・] ク [・] ヤ [・]
2005	羅生門(翻案)	ราโชมอน	英	クリット・フラーモート	ナ [・] ・ [・] ン [・] ・ [・] ミ [・]
2006	手巾	ผ้าเช็ดหน้า	日	フ [・] ・ [・] リ [・] ヤ [・] ・ [・] ・ [・] イ [・] ン [・] カ [・] ヒ [・] ・ [・] ロ [・] ム [・] 他	ト [・] ・ [・] ク [・] ヤ [・]
2008	羅生門	ราโชมอน	日	サ [・] サ [・] モ [・] ン [・] ・ [・] ウ [・] イ [・] リ [・] ヤ [・] シ [・] リ	ソ [・] ム [・] ム [・] ツ [・] ト
	藪の中	ในป่าละเมาะ	日	モ [・] ン [・] タ [・] ・ [・] ヒ [・] ・ [・] ム [・] ト [・] ン	ソ [・] ム [・] ム [・] ツ [・] ト
	鼻	จมูก	日	チ [・] ョ [・] ム [・] ナ [・] ト [・] ・ [・] ・ [・] ソ [・] ・ [・] テ [・] イ [・] サ [・] ・ [・] ン	ソ [・] ム [・] ム [・] ツ [・] ト
	蜘蛛の糸	ใยแมงมุม	日	モ [・] ン [・] タ [・] ・ [・] ヒ [・] ・ [・] ム [・] ト [・] ン	ソ [・] ム [・] ム [・] ツ [・] ト
	地獄変	ฉานนรก	日	ヒ [・] ヤ [・] チ [・] ツ [・] ・ [・] タ [・] ・ [・] テ [・] ン	ソ [・] ム [・] ム [・] ツ [・] ト
2011	河童	ขบป๊ะ	日	カ [・] ラ [・] ヤ [・] ニ [・] ・ [・] ・ [・] ソ [・] ・ [・] タ [・] ・ [・] ス [・] ・ [・] ワ [・] ・ [・] ン	เม [・] น [・] ว [・] น [・] แ [・] กา [・] ม
2015	藪の中	ในป่าละเมาะ	英	ル ^ン ル [・] タ [・] イ [・] サ [・] ツ [・] チャ [・] ハ [・] ン	ナ [・] ・ [・] コ [・] ・ [・] ン
2017	尾形了齋覚え書	บันทึกเตือนความจำของ โองะงะตะ เรียวชะอิ	英	ワ [・] ・ [・] ト [・] ・ [・] ・ [・] ラ [・] ウ [・] イ [・]	ソ [・] ム [・] ム [・] ツ [・] ト
	龍	มังกร	英	同上	ソ [・] ム [・] ム [・] ツ [・] ト
	袈裟と盛遠	เคชะและโมริโตะ	英	同上	ソ [・] ム [・] ム [・] ツ [・] ト

出版年	原題	タイ語題	言語	翻訳者	出版社
	首が落ちた話	เรื่องของหัวที่หลุดออกมา	英	同上	ソムムット
	忠義	ความจงรักภักดี	英	同上	ソムムット
	おぎん	โองงิน	英	同上	ソムムット
	馬の脚	ขาม้า	英	同上	ソムムット
	葱	ต้นหอม	英	同上	ソムムット
2017	伝吉の敵打ち	แรงเค้นแรงกดัญญู	英	ヒンチュット・テンカムチョンソック	7°ロイ
	六の宮の姫君	ท่านหญิงแห่งโระคุโนะมิยะ	英	同上	7°ロイ
	犬と笛	ชายหนุ่มกับสมบัติมหัศจรรย์	英	同上	7°ロイ
	仙人	ผู้สำเร็จเป็นเซียน	英	同上	7°ロイ
	猿蟹合戦	สงครามข้ามสายพันธุ์	英	同上	7°ロイ
	黒衣聖母	พระแม่ทมิฬ	英	同上	7°ロイ
	カルメン	เธอคือการ์เมน	英	同上	7°ロイ

*「蜜柑」は他にウェブサイト掲載の翻訳が2バージョン。

3.2 芥川龍之介作品のアダプテーション

ー「羅生門」翻案から映画「ウモン・パー・ムアン」へー

ククリット・プラーモートの「羅生門」は黒澤明映画の脚本をベースに、演劇用にタイ語に翻案されたものであった。基本的な舞台設定は日本の「平安時代」、「京都」、「羅生門」、「藪の中」となっており、冒頭で事件の参考人として検非違使から帰ってきた途中、羅生門で雨宿りをしていた柚売りと旅法師(僧侶)が、そこに居合わせたもう一人の下人(鬘売りに改変)に事件を語るという設定を借りている。そして、ラストシーンに赤ん坊のエピソードを追加した点も映画と同じであった。

Chakrit(2001)によれば、ククリット氏本人が対談で「英訳のRashomonとタイ語が分かる日本人の友人が部分的に訳してくれた日本語版の「羅生門」、かつて一度見た日本映画版「羅生門」、この三つを継ぎはぎしてタイ語の「羅生門」の演劇脚本を書いた」と語ったそうだが、⁸「藪の中」について何も触れていないことから、果たしてククリットが芥川の原作をどの程度把握していたか疑問が残る。また、Chakritは、「ククリットによるタイ語版「羅生門」は日本文化に基づく仏教思想を明快に示したのみならず、黒澤明によって切り捨てられた「羅生門」と「藪の中」原作の一部の詳細をも加えている」⁹と検証している。

原作のもつ日本文化的な雰囲気を持しながら、芥川の原書とも黒澤の映画とも違った点もある。例えば、仏教思想を盛り込むための僧侶の役割を増やし、部分的にタイ社会へのアイロニーを込めた次のような台詞を挿入している。

⁸ 上掲書, p.91.

⁹ 上掲書, p.217.

「人はよく自分や他人を偉人として見たがっている。英雄やら国のカリスマやら盗賊やら何でもいいからとりあえず大きく見られたい。実際そうは行かない。現実の人間は小さくて弱い。自己中心で臆病で誰とも本気で向き合わない。信用ならない」¹⁰

また、文芸、芸術、マスコミ系の学生なら一度は「羅生門」を見るべし、と言い伝えられているように、タイの演劇業界では、この作品が古典として重要視されている。

そして、基本構成を借りてはいるものの、舞台設定や台詞などを時代やそれぞれの地方に合わせたメッセージ性を加えて改変しながら戯曲「羅生門」は受け継がれてきた。

【表4】ククリット戯曲「羅生門」を上演した公演例

日時	場所・主催者
1965年3月10日	タマサート大学講堂にて国王御面前公演。ククリット氏演出、鬘売り役。同年3月に4チャンネルにて慈善事業としての同舞台ドラマ化、放送。
1972年	チュラロンコーン大学マスコミュニケーション学部
1986年	チュラロンコーン大学文学部
1992年	パンテワノップ・テワグル監督(後に映画「ウモーン・パームアン」の監督)による初の商業舞台化。3ヶ月72公演のロングラン。 同年12月にテレビドラマ化、放送。
1993年	コンケン大学人文学部
2009年	ソクラー大学人文学部
2010年	ランシット大学マスコミュニケーション学部
2013年	ウボンラチャターニー大学人文学部

ククリットの「羅生門」(1966)からさらに45年のちの2011年、映画「ウモーン・パームアン-羅生門」(英題: The Outrage)¹¹ が制作された。これはククリットの翻案を原作に、舞台を今から約500年前のタイ北部の架空の国に置き換えたもので、ククリット氏に傾倒しているパンテワノップ・テワグル監督が、ククリット生誕100周年記念にちなんで映画化したのである。

この映画の基本構成はククリット脚本に忠実であるが、盗人、侍、妻の当事者三人それぞれの人物の背景を描き、娯楽作品としてよりドラマチックに分かりやすい解釈が加えられている。夫は侍でありながら小心者で戦ではしり込みをしているという場面や、妻は女中の娘であるというひげ目から夫の機嫌を常に窺い、心の中に不満を抱えながら使用人と密通しているというエピソードも盛り込まれている。特に、これまで目撃者でしかなかった僧侶役の設定に仏伝のような背景を追加し、映画の冒頭とエンディ

¹⁰ ศักดิ์สิทธิ์ ปราบิข บพละคร เรื่อง “ราชโอรส” หรือ ประชดฐิ Kukrit Pramoj Botlakorn Ruang “Rashomon” rue Pratuphii (Kawna, 1966) p.129.

¹¹ 第4回京都ヒストリカ国際映画祭(2012)招待作品。

ングに仏教賛美歌を流すなど、より仏教色を前面に出している。ちなみに、作品の内容とは直接関係していないが、王族ゆかりの監督とロイヤリスト派俳優がかかわっている作品として、当時タイの反体制勢力(赤シャツ派)に「見ない」抗議運動を起こされたことも話題となった。

その他、ククリット翻案をベースにしている舞台、映画とは別に、小説「藪の中」そのものの手法を借りた小説も生まれた。2006年に出されたシリウォーン・ゲウガーンの小説「トイマム・ストパー・ガーデ殺人事件」は、「藪の中」の語りの構成を借りつつも、年齢、性別、職業、宗教などそれぞれ異なったさまざまな立場の17人の人物による証言を登場させている。それぞれの証言を取り上げて行く語りの構成は、芥川の「藪の中」に非常に近似している。この小説は、2000年にタイ南部で実際起きた虐殺事件のアレゴリーとして書かれており、その地域に長年根ざした宗教・政治思想対立問題、支配層による暴力問題などを批判するメッセージが込められている。

小説の終わりに、最後の証言者が、真実が言えない、何が真実か見えない、と嘆いている場面で、語りを括る最後の一節は、「藪の中」における死霊の言葉へのオマージュとして印象的である。

怖い、何か過ちを起こすこと、誤ったことを発してしまうこと。

だから、ぼくは黙る。(中略)

怖い、何か過ちを起こすことが怖い。何よりも見えないものが怖い。(中略)

助けてくださいアラー。助けてくださいお釈迦様。助けてアダム助けて。

・・・我らの町、タンヨンバルーの上に照らす日射しが強く眩しすぎて何も見えない。

ぼくを助けてくれ・・・ぼくは何も見えない！(p.183)¹²

「藪の中」において夫の命が途絶えようとした時、闇に包まれて周りが見えないと嘆いたのに対して、こちらでは闇ではなく、光が眩しすぎて見えないことになっている。いずれも何らかの障害によって目が眩んで見えない状態に陥る点が共通している。「藪の中」では「真実」を見えなくする個人の見栄あるいはエゴといった個人の内面的な問題に当たるものが、この作品では個人の内面を超える外的圧力として描かれているのである。

この小説は政治小説に与える「バーンウェンファー」文学賞の2005年度の受賞作に選ばれたものの、当時の主催委員長を務めた政治家が「国家安全と平和を脅かす」として受賞を却下した経緯があった。また、翌年の東南アジア文学賞の選考を通過しており、さまざまな意味で問題作であった。

¹² ศิริวรรณ แก้วกาญจน์ กรณีฆาตกรรมโศกโศกโศกโศกโศกโศก โศกโศก (พจนานุกรม, 2006), p.183.(Sirivorn Kaewkarn. Koranii Kattakam To-Imam Sutopa Garde. Phachonphai, 2006, p.183).

【図3】左：映画「ウモーン・パー・ムアン・羅生門」(2011)のポスター、
右：小説「トイマム・ストパー・ガーデ殺人事件」(2006)



以上、述べて来たように、タイにおいては、芥川作品は政治性の高いものとして読まれ、その影響によってタイの政治問題を語るアレゴリーとして(その手法を)応用されることが多い。タイで紹介された「羅生門」や「藪の中」に、政治的なメッセージを込めたアダプテーションを加えられたことが、芥川に政治性の高い作家という印象を持たせている。

ククリット・プラーモート氏の翻案には、「羅生門」と芥川龍之介の名前をタイの読者に広く認識させた功績と、実は映画の内容の大部分が「藪の中」であることを知らずに長い間「羅生門」として誤解を定着させてしまった罪もある。「藪の中」のテーマである「真実はひとつではない」や「人間のエゴイズム」といった普遍的なものに、仏教的な要素を加え、また、戯曲の文面の随所にタイの政治、社会批判と思われる台詞がちりばめられたククリットの翻案に触発された、政治への問題意識の高い知識人も多い。こうして芥川龍之介の作品を読むようになった知識人は、「藪の中」にたどり着く。それぞれの人物がそれぞれの真実を語るが、真相は迷宮入りのまま、判断は読者にゆだねられるという「藪の中」の語り方に感銘を受けた人も少なくはない。また、その感銘を受けたタイ社会の未来を担う若い大学生らによって演劇舞台化が繰り返され、その時々社会・政治情勢を批判する手段として継承されてきた。直接、政治的な内容を書いた小説もあれば、2011年版の映画のように台詞に政治的な言説が具体的になくても、製作者や俳優が反対派閥だからといって、「見ない運動」を起こされたケースもあった。

日本では、「藪の中」によって、「真相は藪の中」という言葉が広まったが、タイで

は、「Rashomon Effect」という映画「羅生門」を観た西洋人によって生まれた言葉が、タイ独特の意味合いで広まった。タイ社会における、口に出してはいけない様々なタブー、特に近年の政治思想の分裂・対立の側面を語る時の隠喩、アレゴリーとして使われるようになっているのも興味深い。

4 おわりに—タイにおける日本文学受容の現在

一般のタイ読者に日本文学の代表として印象づけられた「羅生門」(翻案)をはじめとする一連のアダプテーション作品とは別に、ここ最近の日本「文豪ブーム」に影響を受けた若い世代が、芥川はじめ、太宰治、江戸川乱歩など、近代作家に関心を持ち始めている。2000年代以降の現代文学ブームに乗じて大手出版社がわれ先にと争って大量にミステリー、ホラーなど大衆向けの作品を生産・供給している状況は依然として続いているが、近年の若者たちに生じてきている関心の高さをうけて、小規模のオルタナティブ出版社による著作権フリーになった近代文学作品の翻訳出版が急増し、翻訳、読書、消費行動のほかにアダプテーションを通じた再生産や二次創作が盛んに行われるようになった。第3期の翻訳ブームにおいて、市場が飽和状態になり、バブルが弾けた状態になったといわれていた日本文学出版市場であったが、現在、発展期とも言える、生き生きとした新しいフェーズに突入している。筆者が第3期までを総括した2005年頃には、このような展開は予想もできなかった。今後も、日本文学が日本においてどのように展開し、タイでどのように受容されて行くのか、またタイで独自の発展を遂げるのか、見守っていきたい。

参考文献

- คึกฤทธิ์ ปราโมช(1966) บทละคร เรื่อง “ราชมอน” หรือ ประตูลี้ กรุงเทพฯ : ก้าวหน้า, p.129. Kukrit Pramoj(1966) *Botlakorn Ruang “Rashomon” rue Pratuphii* Bangkok : Kawna, P.129.
- ฉุน ประภาวิวัฒน์(1971) ราชมอน. กรุงเทพฯ : โอเดียนบุ๊กสโตร์. Chun Praphavivat (1971) *Rashomon*. Bangkok : Odien Bookstore.
- จักกฤษณ์ ดวงพิตรา (2001) แปล แปลง และ แปลงรูป บทละคร. กรุงเทพฯ : สำนักพิมพ์สยาม. Chakrit Duangpattra (2001) *Plaeng Lae Plaengrup Botlakorn* Bangkok : Siam Publishing.
- ศิริวรรณ แก้วกาญจน์ (2006) กรณีศึกษาคอร์มโต้ะอิหม่ามสะตอป่า การ์ด. กรุงเทพฯ : ผจญภัย, p.183. Sirivorn Kaewkarn (2006) *Koranii Kattakam To-Imam Sutopa Garde*. Bangkok : Phachonphai, p.183.
- ナムטיפป์・เมธาเสต์ (2007) 「タイにおける日本文学の受容と研究」, 『近代文学』第46集, pp.294-304. Namthip Methasate(2007) *Tai ni okeru Nihonbugaku no Juyo to Kenkyu*, *Kindaibungaku Vol.46*, pp.294-304.
- พนพร ศิริตันสกุลชัย (2016) การอุปถัมภ์การแปลหนังสือภาษาญี่ปุ่นในไทยด้านสังคมศาสตร์และมนุษยศาสตร์ช่วง ค.ศ. 1970-1980. *JSN Journal*

Vol.6 No.1, pp.39-56. Thanaporn Treeratsakulchai (2016) Karnupatham Karnplaenansuephasayyibun nai Thai Dansangkomsastra lae Manusayasastra chuang KorSor1970-1980, *JSN Journal* Vol.6 No.1, pp.39-56.

ナムティップ・メータセート(2017)「タイにおける性的多様性と文学の読みの可能性について—男色表象からBL解釈まで—」, 染谷智幸・畑中千晶(編)『男色を描く西鶴のBLコミカライズとアジアの〈性〉』東京:勉誠出版, pp.153-166. Namthip Methasate (2017) Taini okeru Seitokitayoseito Bungakuno Yomino Kanoseini tsuite - Nanshoku hyoshokara BLkaishakumade- *Nanshokuwo Egaku Saikakuno BL komikaraizuto Ajiano "sei"*, ed. Someya Tomoyuki, Hatanaka Chiaki, Tokyo: Bensei Shuppan, pp.153-166.

ナムティップ・メータセート Namthip METHASATE

(タイ) チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科助教授。日本近現代文学、タイ日文化・文学の比較、翻訳研究など。「日本文学にみるタイ表象—オリエンタリズムなまなざしから観光のまなざしへ—」(『立命館言語文化研究』21巻3号, 2010)、「タイにおける性的多様性と文学の読みの可能性について—男色表象からBL解釈まで—」(染谷智幸・畑中千晶(編)『男色を描く西鶴のBLコミカライズとアジアの〈性〉』勉誠出版, 2017) など。